

島々が育むウミガメたち

—研究と保全の最前線から—

日時： 平成 28 年 10 月 29 日（土）13 時～17 時

会場： 鹿児島大学総合教育研究棟 203 号室

中継： 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室（奄美市名瀬柳町 2-1）

主催： 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

【趣旨】

その名の通り、海に暮らす亀であるウミガメ。周りを海に囲まれる島国のわが国では、ウミガメはおとぎ話にも登場するように、古くから人々にとって馴染み深い存在である。また、世界各地の、特に食料の乏しい島嶼部では肉や卵が重要なタンパク質として利用されてきた背景もあり、過去には乱獲が行われた歴史もある。それに加え、彼らの産卵地である砂浜海岸の人為的原因による汚染や消失も影響し、ウミガメ類が絶滅の危機に瀕した時代もあった。現在は世界的にウミガメ保護への機運が高まり、様々な方面からの保全の道が模索されている。わが国周辺の海には、アカウミガメ、アオウミガメそしてタイマイの3種が多く見られ、島嶼部、特に鹿児島県から南へ伸びる南西諸島の砂浜海岸は、これら3種の大切な産卵場として知られる。本シンポジウムでは、わが国の海に暮らすウミガメ類について、様々な異なる角度からのアプローチを続ける3名を演者に招き、島嶼部を中心としたウミガメ研究と世界的スケールでの取り組みの概要、生態研究の最先端、保全のための地域規模での取り組み等についてご紹介いただき、わが国のそして鹿児島が誇るべき大きな宝であるウミガメ類について、理解を深める機会としたい。

【プログラム】

12:30 受付

13:00 開会・趣旨説明

13:05 『ウミガメ類の生態と保全の概要』

松沢慶将（日本ウミガメ協議会・神戸市立須磨海浜水族園）

13:55 『ウミガメにとっての南西諸島』

石原 孝（神戸市立須磨海浜水族園）

14:45 休憩

15:00 『奄美大島におけるウミガメ類の保全活動』

興 克樹（奄美海洋生物研究会）

15:50 総合討論

17:00 閉会

【要旨】

『ウミガメ類の生態と保全の概要』

松沢慶将（日本ウミガメ協議会・神戸市立須磨海浜水族園）

ウミガメは海に進出したカメの総称で、現存種はオサガメ科 1 属 1 種とウミガメ科 5 属 7 種に分けられ、世界中の熱帯から温帯の沿岸から外洋まで広く生息する。いずれの種も、鱗状の四肢、薄く滑らかな甲羅、塩類腺などを獲得して海での生活に適応した一方で、卵胎生ではないため、産卵の時だけは砂浜に上陸しなければならない。日本では、アカウミガメが福島県以南の主に太平洋側で、アオウミガメが小笠原諸島と南西諸島で、タイマイが琉球諸島でそれぞれ産卵するほか、オサガメが奄美大島で偶発的に産卵した記録がある。海と陸を行き来するウミガメと人間の関係は多様で、涙を流しながら産卵する様子は見る者の同情を誘うが、他方、特に島嶼部では、肉や卵が伝統的に利用されてきた。大航海時代以降の乱獲に加え、20 世紀後半には、漁業による混獲、産卵地の侵食、海岸の開発、原油流出なども起因して、多くの種や個体群が絶滅の危機に瀕した。1970 年代以降は世界的に自然保護の機運が高まり、様々な対策がとられ、成果が確認されているものもあるが、その後の研究により逆効果であったと判明したものも少なくない。生活史を通じて大規模かつ複雑な回遊をすることや、1 世代が 40 年にも及ぶことなど、その生態的特異性ゆえに、ウミガメ類の包括的かつ効果的な保全には、長期的な産卵モニタリングをはじめとする地域ごとの取り組み、生息地の住民による理解と、国際的な連携が不可欠となっている。

『ウミガメにとっての南西諸島』

石原 孝（神戸市立須磨海浜水族園）

南西諸島のウミガメの特徴は様々あるが、まずは国内で産卵するアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの 3 種全てが恒常的・同所的に産卵する点が挙げられる。アオウミガメは大隅諸島、タイマイは奄美群島を産卵の北限とし、アカウミガメの産卵は八重山諸島が南限のため、3 種の産卵域が南西諸島で重なる。次に、奄美群島以南で産卵するアカウミガメは九州以北の日本本土とは遺伝的な集団組成が異なることが最近明らかになった。象徴的なのは南太平洋オーストラリアの個体群に特有とされていた遺伝子型が琉球列島の集団の 20~40% を占め、南に行くほどその割合が高い傾向を示した点である。このことから、琉球列島を通して南北太平洋の個体群間で遺伝的な交流があるか、あったことが伺える。アオウミガメやタイマイに関しては、ごく稀にだが甲長 20cm 程度の幼体が南西諸島で見つかることがある。このサイズはロストイヤーと呼ばれる生息場所がどこにあるのか未だに不明な時期であり、今後の解明が待ち望まれる。また、近年アオウミガメやタイマイをスキューバダイビングで

見かける頻度や頭数が増えているようだ。食用や剥製用に捕獲されることもなくなってきたので、人を恐れない個体が増えてきたからだとも、そもそも個体数が増えてきたからだとも言われている。今は水中写真も簡単に撮れるようになってきており、ダイビング中の写真を通して、南西諸島の海を舞台に、ウミガメの様々な生態が今後明らかになっていくことが期待される。

『奄美大島におけるウミガメ類の保全活動』

興 克樹（奄美海洋生物研究会）

大小の砂浜が散在する奄美大島においてウミガメ類の産卵する砂浜は 130 浜以上あるが、行政による調査が実施されているのは、奄美市の一部および龍郷町全域の約 30 浜で、残りの未調査浜約 100 浜を地域住民や関係団体と分担して、2012 年から当研究会が主体となり実施している。2012 年の奄美大島全域におけるウミガメ類の産卵回数は 1081 回（アカウミガメ 605 回、アオウミガメ 327 回、種不明 149 回）で、初めて奄美大島全域の産卵状況が明らかとなった。また、奄美群島においては、2013 年から徳之島での調査が実施され、奄美大島、喜界島、沖永良部島、与論島を含めた奄美群島全域では、産卵 1932 回（アカウミガメ産卵 1141 回、アオウミガメ産卵 662 回、種不明産卵 129 回）という結果が得られ、2013 年には日本全国の産卵回数の約 1 割を奄美群島が占めていた事が明らかとなった。

奄美大島では、2012 年以降、ウミガメ産卵回数が減少しており、アカウミガメの産卵回数の減少、アオウミガメの産卵回数の増加する傾向がみられる。2015 年には、雌産卵個体の衛星追跡調査が行なわれ、アカウミガメは東シナ海を摂餌海域としていること、アオウミガメは九州や本州、伊豆諸島を摂餌海域としていることが明らかとなった。また、奄美大島では、在来種であるリュウキュウイノシシによるウミガメ卵の捕食が確認されており、2015 年は総産卵巣数の約 25%にあたる 89 巣が捕食され、鹿児島県による保全対策が進められている。

当研究会では、ウミガメと産卵する砂浜の保全を目的に、ウミガメミーティングという講話会や観察会を定期的で開催している。